

イミテーション・ゲーム

―「トランスレイシャル」/「トランスジェンダー」の真正性と

揺らぐ人種の境界線―

ジョン・G・ラッセル (岐阜大学)

異人種として通用することは真正性に対する罪であると同時に「真正性」は現代を創設した基礎的な嘘の一つである。

ヘンリ・ルイス・ゲーツ・ジュニア(1996: 353)

1 人種問題とジェンダー問題の交差点

人種もジェンダーも社会的な構築物であるということが今頃になって正論であると言われるようになっている。しかし、人種とジェンダーについての固定観念は未だに根強く定着し、現代の人種とジェンダーに関する言説には本質主義な見解が残っている。それは特に人種とジェンダーの境界線を超える人々に対して明白に表れていると言える。その例が 2015 年に話題になった Rachael Dolezal (レイチェル・ドレザル)と Caitlyn Jenner (ケイトリン・ジェンナー)の、トランスジェンダーとトランスレイシャル(transracial)及びトランスエスニック(transethnic)の人々の存在をめぐる論争にはっきりと表れている。それを如実に示す騒動がアメリカ・ワシントン州スポケーン市で起こった。黒人の活動家で黒人研究の大学講師でもあり、全米黒人地位向上協会 (NAACP) の支部長をも務めたレイチェル・ドレザルが、実は黒人ではなく白人であることが地元のテレビ局によって暴露された。両親は白

人で黒人の祖先が一人もないドレザルが本当の自分は黒人であると主張し、長年、黒人として生活していた。地毛が金髪で肌の白いドレザルは肌を褐色にし、黒人のヘアスタイルを真似、「黒人」に変身していた。秘密が暴露された後、ドレザルはメディアの取材に対し自分のことを black（黒人）、biracial（混血）や transracial と呼称し、幼い時から自分が黒人であると思い、自画像を描く際、自分の顔色に「brown」（茶色）のクレヨンを塗っていたと述べている（Dolezal 2017: 9）。つまり、彼女は自分の「本当の姿」、自分の精神というか魂が黒人であり、自分が認識する人種と自分の身体的な人種あるいは社会から割り当てられた人種が一致していないと感じ、自分はいわゆる「トランスレイシャル」の人間であると主張した。

実は、ドレザルほどの騒動にはならなかったが同じように考える人がその一年前にインターネットの Tumblr に現われた。Yuki Ayamine（綾峰雪）と名乗る 16 歳の白人女性だ。ブログで、自分は見た目が白人に見えるが、本当の自分は日本人であると宣言したのである。鏡で自分を見ると「disgusted and disappointed」（嫌悪と失望）を感じ、本当の自分が隠されていることに絶えられず自殺さえ考えたと述べた（Ayamine 2014）。彼女は自分のことを「トランスエスニック」と呼び、いわゆる性同一性障害に例え、自分は「民族違和感」（ethnic dysphoria）に悩んでいると主張している。彼女のブログを読んだ Tumblr の多くのユーザーは彼女を人種差別主義者と非難した。それに対し綾峰はこう反論している。

我々トランスエスニックの人たちに対する非難の一つが我々を差別主義者だという。自分と異なる文化に憧れを持ち、正しく認識することは人種差別ではない。我々が熟知する体が魂とは一致していないことを認めることも人種差別ではない。自分の文化において我々が正常であると受け入れられることを望むことは人種差別ではない。問題は我々の身体の色が間違っていて、そのせいで我々が目立つ。私が望んでいるのは、私が正しい人種と国籍を持つ者として見られることだ。正しい代名詞で呼ばれるように。私はトランスエスニックで居たくない。これは私

が選択した存在ではない。私はある朝、目が覚めて、突然日本人になりたいと思ったわけではない。私は長年、白人の体でアメリカ社会に居場所がないと感じていた。やっと自分の魂が日本人であるということを認める自信がついた (Ayamine 2015)。

彼女はこのブログをアップロードした後、激しい非難を受け、その後 SNS から完全に姿が消えた。その殆どの非難は3つに分けられる。その1、トランスエスニック・トランスレイシャルという人間は存在せず、彼女は精神異常者ではないか。その2、いわゆるトランスエスニック・トランスレイシャルの事情をトランスジェンダーの人と同列に論じるのはトランスジェンダーの人々に対する差別や侮辱であり、彼ら彼女らに対する一種の epistemological violence (認識論的な暴力) である。その3、自分が所属したい人種を勝手に手に入れようとする事は一種の cultural appropriation (文化的盗用) であり、また、白人の主体性を優先とする white privilege (白人の特権) の現れでもあるという反発が挙げられる。幾つかの点でアヤミネのトランスエスニック宣言に対する非難はドレザルを巡る論争を先取りしていた。

綾峰とドレザルが登場する以前、トランスレイシャルという概念はトランスセクシュアルを議論する際に、哲学分野、特にフェミニストの書籍や論文に仮説的な存在としてしか取り上げられていなかったのである。特にラジカルフェミニトは男性から女性へ(MTF)というトランスセクシュアルを排除するためにトランスレイシャルの例を批判的に取り上げている(Raymond 1994、Burkett 2015)。例えば、ラジカル・フェミニスト Janice Raymond (ジャニス・レイモンド)が『*The Transsexual Empire*』(トランスセクシュアルの帝国)の中でこう語っている。

白人になりたい黒人がトランスレイシャルという病気に悩んでいるのか…トランスレイシャルの医療的介入の要求がない理由は、多くの黒人が自分の肌の色ではなく、むしろ社会を変えるべきだということがわかっているからだ(Raymond

1994: xvi)。

また、ドレザルの登場を先取りしたように、Burkett は、『*New York Times*』紙にこう書いている。

[性転換手術を受けた]トランスの人々が好む「私が間違った体に生まれた」というレトリックも同じように[女性にとって]侮辱的であり、女性を胸とヴァギナに還元しているのである。もし、若い白人男性が、突然自分が間違った体に閉じ込められていると宣言し、黒人のコミュニティに受け入れられたいために化学物質を使って自分の肌の色を変えたり、髪を縮れ毛にしたりすることを想像しなさい。

そして、ナイジェリア人フェミニストであり、作家チママンダ・ンゴズィー アデーチエがこう語る。

人々がトランスジェンダーの女性のことを語る時、トランスジェンダーの女性はトランスジェンダーの女性だと私は思う。もし、あなたが男性として世界に生きて来たとするば、それによって男性に与えられた特権を経験したとするば、その後、ジェンダーを変えたなら、あなたの経験は最初から女性としての世界を経験しておらず、かつては男性と同等の特権が与えられていたので単純に女性と同じであると受け入れることはできない。すべてのものを一つにまとめることがよいとは思わない。女性の問題はトランスジェンダーの女性の問題とまったく同じものというふうに議論するものではないと思う。私が言いたいことは、ジェンダーは生物学ではなく、社会学なのだ(Adichie 2017)。

つまり、ラジカル・フェミニスト（特に、いわゆる Trans-exclusionary radical feminists (TERF、トランスを排除するラジカル・フェミニスト) は、MTF のトランスセクシュアルが女性の物真似をする不愉快な偽物だと考え、女性として通用し

ようとする男性に過ぎないと非難的な姿勢を示す(Brubaker 2016、2017; Heyes 2006)。男性として生まれた人間がどんなに自分の認識が女性であると信じていても女性としての共通する経験がなく、本物の女性にはなれないと論じる。皮肉なことに、ジェンダーと人種に対し、類推することを非難する人々がトランスジェンダーの主張を却下するために同じ類推をしている。

しかし、これらの経験論にはいくつかの問題がある。例えば俳優 Michael Fosberg (マイケル・フォスバーグ) は子供の頃に母親から貴方は白人だと言われ、白人として育てられ、32歳の時に実父を探し見つけるまでは自分が実際には白人と黒人の混血であることを知らなかった(Fosberg 2011)。要するに、医学的な介入を受けずに彼の人種は「白人」から「黒人」に変わったようである。

女性としての生きた経験がないから「真正」の女性になれないと主張するラジカル・フェミニストの理屈に沿えば、性転換手術を受けるまで男性として生きてきた男性は「本物」の女性になれないという理屈と、32歳まで「白人」として育てられ、白人の特権を経験し「黒人」としての経験がゼロのフォスバーグは「本物」の黒人になれるのかという疑問が湧き上がり、根本的に transracial を認めない人々の論理と全く変わりがないことになる。勿論、フォスバーグには生物学的な変化は何一つない。つまり、皮肉なことにジェンダーと同じように、既述したアディーチの言葉を借りれば、人種も生物学ではなく、社会学的であるということを証明している。

疑問はここで終わらない。例えば、フォスバーグは自伝で黒人の血を引いていると教えられる前に、自分が黒人ではないかという疑念を抱いていたと書いている。また、白人の友達も彼を黒人であると思っていたのではないかと感じていた。その理由が、自分の好きな音楽家やコメディアンが黒人であり、派手な服装を好むこと、そして、ある時、子供の頃からの友人に「他の誰よりもあなたが格好よかった(“you were cooler than cool”)」(Fosberg 2011: 80)と言われたことなどにより、白人であることにも疑いを持っていたと述べている。彼の実父が黒人であるという事実を友達に告白した時、彼らも漠然と彼には黒人的雰囲気があると感じていたと告白してい

る。また、彼自身も黒人であることがわかる前から黒人との一体感を持っていたと主張している。この場合、彼の派手なファッション・センスや格好良さ、音楽の趣味までが彼の「黒人の血」によって決定され、黒人に対するステレオタイプを具体化し助長している。要するに、「血」は人種を決定し人間の個人的な趣味、行動ぶり、気質までを左右するという人種に対する時代錯誤の俗信が見られる。

では、どのぐらいの「黒人の血」を引けば黒人になれるのか。また、どのぐらいの「格好良さ」が「黒人性」を決定するのだろうか。かつて、アメリカに「一滴のルール」があった。それは黒人の血を一滴でも引いていれば、黒人になるという規則があり、現在でも根強く残っている。興味深いことに、最近アメリカで人気になった Ancestry.com などという DNA 鑑定サービスを利用して、自分の出自や系譜を辿る流行が生物学的人種という俗信を復活させる働きをしている。それによって、最近「アフリカ系の DNA」を持つと判定された人は、黒人になれるかどうか、インターネットと Twitter で議論されるようになっていく。

他方、エンタティナーマイケル・ジャクソンの娘パリス・ジャクソンのように、人種的に「不明」な例もある。体外受精でマイケル・ジャクソンと白人の母親の間に生まれたと言われている彼女は本当にジャクソンの生物学上の実子であるかということが一般的に疑問視されているが、彼女自身は、ジャクソンから父親だと言われ、自分は黒人であると何の疑問を持たず信じていると雑誌のインタビューに明白に答えている (Hiatt 2017)。黒人の家族に育てられ、黒人の世界に馴染み、自分が黒人だと言われた人や黒人としてのアイデンティティを持つ人が黒人なのか。一体誰がそれを決めるのか。

自分の所属する人種と人種的なアイデンティティも生物学的な要素ではなく様々な社会的要素で左右されているのである。それは黒人に限らず、日米における混血の人々の奮闘を描くドキュメンタリー映画 *Doubles* (『ダブルス』、1995 年) の中でも表れる。白人と混血の日系アメリカ人の間に産まれた息子の容姿が白人寄りで金髪だったので、病院関係者がその子の出生証明証の「race」の欄に「白人」と

記そうとしたが、母親はそれに反対し、日本人の系統も認めることが重要だと思い、「white」と「Japanese」両方の記載を要求していた。

白人であること、黒人であることやアジア人であることは単に生物学、祖先や出自の問題だけではない事は明白である。

2 トランスイズムに見る本質主義

私はそのトランスジェンダーとトランスレイシャルに共通する排他的論理を transism (トランスイズム)と呼ぶ。トランスジェンダーイズムにしても、トランスレイシャリズムにしても両者の見解は本質論的である。「自然」対「人工」、「真正」対「擬似」の境界線を厳しく維持しなければならないことを前提としている。ある意味で、アメリカ社会のドレザルに対する反応は SF 小説のようにも読み取れる。Philip K. Dick が書いた *Do Androids Dream of Electronic Sheep?* (『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』、1968 年、映画『ブレードランナー』(1982 年)の原作)が人間と人造人間を区別するために、エンパシーテスト(感情移入度テスト)を使う刑事を描いた作品と同じように、ドレザルの主張を拒否するためには、感情移入度テストではなく、言わば、人種のチューリングテストが必要なのではないか。

周知の通り、チューリングテストとは 1950 年にコンピューター科学者アラン・チューリングが考案し、機械が知能をもつかどうかを判断する人工知能のパッシングのテストとも言えるものである。このテストを簡単に説明すると、二人の人間と一台のコンピューターがあり、一人は判定者で、別々の部屋にいる人間とコンピューターがキーボードとスクリーンで会話をを行い、判定者が聞いた質問の回答に基づいて、通信する相手が人間かそれとも機械かを判定するというものである。もし、判定者が相手を人間と区別が出来ない場合、この機械はテストに合格し、人間と同等の知能があると判定されるわけである。言い換えれば、その機械は人間と知的に同様な存在になるということである(Turing 1950)。

興味深いことに、そもそもイミテーション・ゲームと呼ばれたチューリングテストはジェンダーを判定するゲームであった。こちらのゲームの目的は、相手が機械か人間かを判定するのではなく、男性の判定者が別の部屋にいる二人の相手のジェンダーを正しく判定できるかというもの。つまり、プレイヤーA、BとCの3人がいて、一人は男性、もう一人が女性、残る一人が男性か女性で、判定者Cがノートに書かれた質問とその回答によってAとBのジェンダーを正しく判定しようとするゲームであった (Turing 1950: 433-434)。

プレイヤーが何であれ (男性、女性、機械)、チューリングのイミテーション・ゲームは根本的に本質論的なものである。また、人工知能の存在を判定するためにデザインされたテストにも関わらず、その知能もしくはその外的な現れが結局、擬人観的 (anthropomorphic) なものになる。

最近では人間型ロボットの開発者石黒浩の研究が暗示するように AI からロボットの開発を予測すると、ロボットは人間そっくりにコミュニケーションができるようになるだけではなく、外見と動作を人間に相似させることでそのロボットは人間同然な存在になるであろうと推測される。

実は、英語には「もし、あるものがカモに見えるなら、カモのように歩くなら、そしてカモのように鳴くなら、それはカモだ」という表現がある。しかし、これには真正性の問題が残る。つまり、カモが持つと思われる全ての特徴が揃ったものは文字通り「本物」かもしれないが、カモを巧みに真似しているものである可能性も残っている。その場合、本物と偽物をどうやって区別できるのか困難である。その解決方法の一つが、真正性の有無である。つまり、本物にしか存在していない本来は真似のできない真正を所有しているという推測であるが、事前に、その対象が偽物とは知らず、客観的あるいは実験的にそのものとの差異がなければ、その対象は事実上、本物と同じ存在論的空間を占めると考えられる。

トランスレイシズムは、トランスフォビア及びトランスレイシャリズムに対する拒否と同様に、本質論的考え方を前提にして人種を生物学的なものとして具体化し

ている。しかし、現在、その主張は生物学だけではなく、出自系統という観点からも言い表されている。結局、その反復的な見解においては自分が所属する人種が生まれによって決定されると思われている。自分が生まれながらに割り当てられた人種とは異なる人種に属すると主張することは「cultural appropriation」(文化盗用)だけではなく、「racial appropriation」(人種盗用)として厳しく非難されている。

トランスレイシャリズムの存在をめぐる反論は「出自」と「祖先」に言葉を変えているが、根本的には人種を生物学的な現実として具体化している本質に基づいた論点である。なぜなら、結局、この恒真式な考え方によると、自分の人種は自分が生まれ持った人種に決定され変えられないものであると主張している。繰り返しになるが、自分が生まれ持たない人種を主張することは文化の盗用であり、更には人種の盗用と見なされている。その意味で人種は単なるアイデンティティだけではなく、一種の所有物でもある。トランスレイシャルと名乗る人々に対する非難の一つは、彼ら彼女らが異人種として生活することは相手を騙す、真正性のない存在を選ぶことであるというものである。

トランスレイシャルの(authenticity)真正性が拒否されている理由は二つあり、一に、トランスレイシャルの人々の異人種に対する同一は精神異常または、錯覚であるというもの、二に、彼ら彼女らが実際には異人種と同一せず、何らかの理由により相手を騙し、それによって利益を得ようとしているというものである。

現在のトランスレイシャルに対する拒否は、トランスセクシャルの人々に対する拒否と根本的に論理が共通している。例えば、1930年代に最初のトランスセクシャルと言われている Lili Elbe (リリー・エルベ) (映画『リリーのすべて』のモデル) に対し、当時の精神医学者の多くが Elbe の女性としての性自認は disease (病気) と診断し、性転換手術を行うより、色々な医学や精神医学の治療を行い、「彼」の「錯覚」を処理しようとした。Elbe の伝記の序説にはオーストリアの性科学者 Norman Haire が次のように語っている。

精神療法を受けてみた方がよかったと思う。もしそうしたら、Andreas Sparr [Elbe の元の名前]は治ったかもしれない、あるいは、少なくとも彼が人生に適応できただろう。適切な精神療法によって彼の二重性格が解決されたかもしれない。彼の死で終わったいくつかの危険な手術を受けることの代わりに彼がより真つ当な人生を営むことが可能だったかもしれない(Hoyer 2004: 17)。

3 娯楽と教訓としての人種変容

つい最近まで、race change (人種的変身)は人々(主に白人)を楽しませる娯楽として様々な媒体で、特に白人によって消費されていた。一般的に言えば、人種変身とは舞台上において白人が一時的に黒人(または、その他の有色人種)に変身することを指す。しかし、人種的変身は2種類に分けられる。一つは、白人が舞台上でメイクをして黒人に扮するクラシック・ブラックフェイスである。

その一方で、白人が白人同士で黒人などに対する差別の現実を理解させるために利用されている「教訓的ブラックフェイス」という手段もある。例えば、1950～1960年代に John Howard Griffin (ジョン・ハーワード・グリフィン)と Grace Halsell (グレース・ハルセル)のような、リベラルな白人のジャーナリストが黒人やその他の有色人種に対する差別を白人の読者に伝えるために、一時的に非白人に変装することがあった。また、アメリカの *Black White* (2006)というテレビ番組では、娯楽と教訓の目的で、白人の家族と黒人の家族が互いに特殊メイクを使い、「人種を変え」、黒人に対する差別や白人が味わう特権を実感させる試みも行っていた (Russell 2011)。

どちらにしても、ブラックフェイスの人種的変身を通して白人が自分を消そうとし、自分が演じる黒人のステレオタイプで本物の黒人と置き換えようとする。それに対して、非白人が白人に扮するホワイトフェイスもあるが、これは比較的少なく、その目的も違う。ブラックフェイスの目的は黒人を愚かな存在として模倣すること

によって白人至上主義を宣言することになることに対してホワイトフェイスは白人至上主義や白人の特権をパロディーにすることである。ブラックフェイスは黒人に対する差別を助長することであるが、ホワイトフェイスの狙いは既述した教訓的ブラックフェイスと同じように、白人の黒人に対する差別意識や偏見を可視化することにある。これがその目的を果たしたかどうかについて議論する余地があるだろう。なぜなら、その称賛すべき目的があるにもかかわらず、人種的ステレオタイプを覆すよりも更に、それを強化する反面を持ち合わせているからである。

4 レイズムとシスレイスの展望

トランスジェンダー・トランスセクシュアル及びトランスレイシャルの人々に対する差別を私は transism (トランスイズム)と呼んでいる。普段、トランスイズムはトランスジェンダーの人々に対して差別、排除をするが、トランスレイシャルを含め、すべての「trans-」の人々に対しても類似的差別的論理が見られる。それは社会が維持している二項対立的な境界線を越える人々に対する拒否に基づいた論理とも言える。その排除はいくつかの共通した恐怖に基づいている。一つは、真正さが問われている「トランス」の人々が自分こそが「真正」であると思う人々に存在主義的な脅威であるという危機感を引き起こす。二つ目は、彼ら彼女らが社会により作り出され、維持されている境界線に挑むことによって、「トランス」の存在を問い質されるだけではなく、自分が所属するジェンダーや人種の立場に大きく影響を及ぼすのではないかと憂慮。三つ目は、trans- の人々の visibility (可視化)により社会の様々な境界線が以前より容易に“trespass” (侵入)もしくは“invade” (浸透)できるようになっていることが顕著に表れていることに対する不安などである。

例えば、ドレザルはトランスジェンダーと反トランスレイシャルの両方の嫌悪と怒りの矛先となったが、ドレザルの登場以前にも、白人の芸能人が黒人を始めとする非白人の文化や身体(的特徴)までを盗用することに対しての批判が時々盛り上

がっている。それらはテレビタレントのキム・カードシアンやオーストラリア出身の女性ラッパー、イギー・アゼリアなどが黒人の音楽、仕草、俗語、ファッションなどを採用するだけではなく、整形することによって黒人を連想させる身体的特徴までを文字通り身につけようとしている。エルヴィス・プレスリーのように、黒人の文化を盗用した人々がいたが、彼は自分の白人のルーツを明白にした上で人種の境界線を保ち、黒人文化の盗用以外、少なくとも公的にはそれ以上は超えようとはしなかった。

しかし、時を経た 21 世紀の現在は（自分が）白人であることをあまり意識せず（あるいは白人であることを拒否する）、黒人の文化を消費し、黒人と婚姻の有無を問わず混血の子供を出産すれば、その結果、黒人であることや白人であることがある程度曖昧になる時代になりつつある。

同じように、トランスジェンダー・トランスセクシュアルの人々は、いわゆる cisgender（シスジェンダー）の人々（非トランスジェンダー、つまり、生まれた時に診断された身体的性別と自分の性同一性が一致し、それによって生きる人々）のアイデンティティを対比し、確定させる役割を果たしてきた。Cisgender（cis はラテン語で「こちら側の」という意味である）とはトランスジェンダーとそうではない人々の違いを表すために作られた新語である。ある意味で、ジェンダーの境界線において新たな二項対立を設けなければ、気がすまないという人間の心理を表し、cisgender という新たなアイデンティティを作成しているとも言えるかもしれない。

最後に、トランスセクシュアルと同じように整形などの医学的な進歩に伴い、トランスレイシャルも医療介入を利用して自分の「人種」的な身体を、自分自身の人種認識に一致させようとする人々が増えるかもしれない。その時には、トランスジェンダーと同じようにトランスレイシャルという枠組みにも従来の人種を「越えて」多様なアイデンティティを持つ人々が現れるかもしれない。

実はそのバリエーションは多く、いわゆる異人種として生きる人がいれば、

transblack、transwhite、transasian などとして生きる人々もいることが想像できる。そして、それに対して cisrace（シスレイース）という新しいアイデンティティが誕生する可能性もある。このアイデンティティが新しいというよりも homosexual（同性愛）と heterosexual（異性愛）と同様にアイデンティティを定義する考え、欲望や行動が意識的になり、それらが自己と他者のアイデンティティを確立させて差異の基礎となるであろう。

参考文献

- Adichie, Chimamanda Ngozi. Interview, *Channel 4 News*, Facebook.com, March 10, 2017, <https://www.facebook.com/Channel4News/videos/10154640002756939>.
- Ayamine, Yuki. "I Am Finally Going to Come Out as a Transethnic Japanese Woman." *Animecirclejerk*, 2015, https://www.reddit.com/r/animecirclejerk/comments/2s76wq/i_am_finally_going_to_come_out_i_am_a_transethnic/?st=j7cska61&sh=4b3a3b09.
- Ayamine, Yuki. "This Song Would Pierce Her Heart." Reblog, *Eveamadeus*, May 7, 2014, <http://eveamadeus.tumblr.com/post/85101930357/yuki-no-monogatari-i-am-finally-going-to-come>.
- Black. White.* Television, FX Network, March 8-April 12, 2006.
- Brubaker, Rogers. "The Uproar Over "Transracialism."" *The New York Times*, May 18, 2017.
- Brubaker, Rogers. *Trans: Gender and Race in an Age of Unsettled Identities*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2016.
- Burkett, Elinor. "What Makes a Woman." *The New York Times*, June 7, 2015, <http://www.nytimes.com/2015/06/07/opinion/Sunday/what-makes-a-woman.html>.

Doubles: Japan and America's Intercultural Children. Dir. Reggie Life. Documentary.

East Cathan, NY: Global Film Network, 1995.

Dolezal, Rachael. *In Full Color*. Dallas, TX: BenBella Books, Inc., 2017.

Dick, Philip K. *Do Androids Dream of Electronic Sheep?* New York: Ballantine Books, 1968.

Fosberg, Michael Sidney. *Incognito: An American Odyssey of Race and Self-Discovery*. Chicago, IL: Incognito Inc., 2011.

Gates, Henry Louis. "White Like Me." In Abbey Wolf, ed., *The Henry Lewis Gates Reader*. New York: Basic Civitas, 2012: 333-358.

Hiatt, Brain. "Paris Jackson: Life After Neverland." *Rolling Stone*, January 24, 2017, <https://www.rollingstone.com/music/music-features/paris-jackson-life-after-neverland-128510>.

Heyes, Cressida J. "Changing Race, Changing Sex: The Ethics of Self Transformation." *Journal of Social Philosophy*, vol. 37, no. 2, Summer 2006: 266-282.

Hoyer, Niels. *Man into Woman: The First Sex Change: A Portrait of Lili Elbe*. London: Blue Boat, 2004 [1933].

Raymond, Janice. *The Transsexual Empire: The Making of the She-Male*. New York and London: Teachers College Press, 1994.

Russell, John. "Race as Ricorso: Blackface(s), Racial Representation, and the Transnational Apologetics of Historical Amnesia." In Yasuko Takezawa, ed., *Racial Representations in Asia*. Kyoto and Australia: Kyoto University and TransPacific Press, 2011: 124-147.

Turing, Alan M. "Computing Machinery and Intelligence." *Mind*, vol. 59, no. 236,

October 1950: 433-460.

